

医療ルネサンス No.6468

C型肝炎の課題

3

5

ウイルス消滅後に発がん

「先生のうそつき」

C型肝炎の新薬で治療を受けた長崎市の女性(80)は2016年7月、国立病院機構長崎医療センター(長崎県大村市)の診察室で、信頼する主治医に思わずそんな言葉を投げた。

効果が高く副作用が少なくと言われる新薬を待ち望んでいた女性は同年2月、ハーボニー(一般名・ソホスブビルとレジパスビルの合剤)という飲み薬の治療を開始。12週間、毎日1錠

飲み続け、肝炎の原因であるウイルスが消えた。ところが、服薬終了から3か月足らずで、それまで低く安定していた腫瘍マーカーの数値が跳ね上がった。検査画像では肝臓に小さく丸い影が写った。

「がんだと思います。すぐ入院して治療しましょう」。主治医の八橋弘さんは、女性と、そのそばに付き添う夫(82)と向き合い、そう話した。

「ショックでした。治る

かっっていない。

と思って薬を飲んだのに、まさかすぐがんが見つかるなんて。主人を見送るまで死ねないという思いで、頭がいっぱいでした」。がんが見つかるのは初めてだけに、女性は動揺した。

この翌日入院。発見が早く、がんは1・4センチと小さかった。開腹はせず、おなかの表面から針を刺し、ラジオ波という高周波電流の熱で患部を焼く治療を受けた。退院から1か月後、腫瘍マーカーは問題ない値に下がった。

ハーボニーなど、ここ数年で続々と登場した飲み薬を使って治療した直後に、がんが見つかる例が専門家の注目を集めている。同セ

ンターでは患者約300人中4人に見られた。他の医療機関でも同様の報告が相次いでいる。こうした発がんがどのようにして起こるのか、そのメカニズムはわ

肝炎は放置すると肝がん

に進行するが、治療でウイルスを除去しても、100%がんにならないわけではなく、年月を経てがんになることはあり得る。ウイルス除去で期待できるのは、「がんになる確率を下げる」ことだ。ただ、薬による治療直後の発がん例は最近見られるようになったもので、よく知られていない。どんな患者に起こりやすいかなどの解明が課題だ。

女性は今、通院して経過観察を受けているが、がんは消え、状態は安定している。16年10月には所属する合唱団のコンサートに予定通り出演。回復を誰より喜ぶ夫は、12月に迎えた結婚56年の記念日、コチヨウラを贈ってくれた。

八橋さんは「ウイルスが消えたら治療は終わりと誤解されがちだが、中にはこのような例もある。がんも早期に見つかれば治療できるので、慎重に経過観察することが大切」と話す。



女性は薬を飲む度、ポスターにシールを貼り治療に励んだ。終了直後の発がんはショックだったが、「他の患者さんにも正しい知識を持ってほしい」と語る